

永祿三年正月の近衛家の文事

——近衛植家新年試筆詩をめぐって——

中本 大

はじめに

永祿三（一五六〇）年正月元日（鶏日）、五山相国寺の長老のもとに、耳順に近い前関白、近衛植家から、新春の試筆詩が届けられた。禅僧たちはすぐに追和、詠作は相国寺廣徳軒の惟高妙安のもとに集められた。唱和詩の作者は惟高をはじめ、仁如集堯、玄圃靈三、そして植家の息子で永祿初年から僧録を執っている鹿苑院主、陽山瑞暉の四名であった。その全容が国立公文書館内閣文庫蔵「惟高詩集」所収永祿三年詠草に収録されている。

鶏日試毫

和氣藹然新歲迎、奉盃試筆賞元正、東皇巡狩春風国、
一曲黃鶯警蹕声

警ハ天子ノ行幸ノ時、ヲトリアルソト云声ソ、
蹕ハ御カヘリタト云声ソ

植家

永祿三年正月の近衛家の文事

永祿三曆元朔

陽明殿下、有新春之尊詠、縦時風伯有意、吹著于野衲

繩床、四七驪珠、璨々然昏眼生光、重於随和至宝、是天

賜也、年初慶幸蔑以加焉、感佩吁陽春芳調、雖和弥歎

就諸徒春韶之列、寒竿凍吟一章 拝献大閣々

下、歷電覽則惟幸 時分ニテモナクチヨウシハツレナル曲ノコトソ

朝陽明啓歲新迎、佳製祝延青帝正、十五国風剛後什、

一篇太雅入松声 相国妙安退衲

陽明殿下春首有 尊製、謹奉塵 嚴韻聊伸祝詞萬

乙云

年去年來屢送迎、君哦唐体祝王正、威儀高出漢家

上、朝賀滿門車馬声 雲間野釈集堯頓首

春自鶯梢燕朶迎、河清海晏建寅正、陽明殿下雞晨祝、

聽得三呼万歲声 鹿苑院

陽明殿下 伏観試筆春詩一律

愚蒼風覽動第胸、謹依

敬韻勉賡俚詞

上獻

一 転洪鈞萬景迎、衣冠文物賀新正、

太平天子無巡幸、柳巷花村歌舞声

天子初元太平日、風揺花柳亦歓声 靈三

クル春ハ道シアルヨヲ白雪ノ深キニ飯ルアトモタトラシ

一夜アケテコソトヤキノウケウノ春 植家

唱和詩に続く『古今和歌集』巻頭歌を踏まえた植家作の発句からは、余裕や諸諺が感じられる一方、和歌には新春を迎えた植家の過去との訣別や未来に向けての重大な決意が示されていることに注目したい。

陽山の慈照寺入寺を直接的な契機として、近衛家が惟高を中心とする五山長老との交流を深めていった経緯については既に拙稿で論じたことがある。この唱和などもただ単純にそうした事例の一つと考えてよいのであろうか。本稿では長く『実曉記』の名称で中世文学研究者にも用いられてきた、興福寺別当、光明院実暁の著録『習見聴諺集』巻六末所収、追和詩と同じ永祿三年正月の連歌興行記録を参照しつつ、この唱和詩の成立事情を検討し、あわせて室町時代末期近衛家、就中、大閤植家の文事について考察したい。

一

『習見聴諺集』巻六末、目録によれば和歌連歌雜記四十二條最後（実際は連歌雜記十一條の冒頭）の二項目は記事末尾の記載から永祿三年正月の連歌興行について記したものであることが知られる。以下、本文を引用する。

千句於京都聖護院御興行 正月五日ヨリトヤラン

あさみとり春そめいたす霞哉 梅

水はれてつむも雲の若葉哉 金

春の夜はくもるを月のひかり哉 橘

梅か香にうらみぬ風のやとり哉 清誉

ちりくるものこるも雪は水なわ哉 宗叢

鶯やぬさみたるかの玉のこゑ 玄哉

若草のした、りくたく水かな 紹巴

春風をなひきてさそふ柳哉 藤孝

雪にきえて入日しつけき光り哉

待ほと心の心にさかぬ花もなし 春

正月於称名院御即位の前日御興行となん

咲やこの花ひとつさへ春の花 蒼

以上永祿三庚申三五写之

その内容は、正月五日から聖護院で興行された千句連歌および同じく正月、「御即位の前日」に催されたという称名院、三条西公条が主宰した興行の発句一覽である。現存作例は少ないものの、この時代、禁裏や大覚寺・聖護院等の門跡寺院で連歌や和漢聯句興行がしばしば催されていたことは諸記録類に見えたとおりである。他方、公条の連歌壇における権威については改めて述べるまでもあるまい。

記事の概要を確認しておこう。「聖護院御興行」とされる千句の参会者は発句詠出の順に、近衛種家（二字名・梅）、大覚寺門跡義俊（種家弟、金）、聖護院門跡道増（種家弟、橘）、不断光院長老清誓、連歌師宗養、連歌や茶の湯の愛好で知られる堺の辻玄哉、連歌師紹巴、細川藤孝（幽齋）、そして近衛家当主で関白の前久（種家息、春）である。唯一作者表記のない第九百韻の発句作者は、聖護院での興行であることを勘案すれば、種家息で聖護院新門跡の道澄である可能性が高いと思われる。ただし、聖護院での張行とは言うものの、第十百韻発句「待つほとん」を前久が詠出していることから、実質的には近衛家主宰の興行と見なしてよいと考えられる。

一方、「正月於称名院御即位の前日御興行」は、三条西公条（二字名・蒼）の発句が記載されるのみで、永禄三年正月二十七日に挙行された正親町天皇の即位礼前日の興行であるという以外、詳細は不明である。

この公条の詠作と併せて挙げられていることから、「聖護院

御興行」の千句連歌が正親町天皇の即位式を祝したものと企図され、南都の実暁をはじめ周囲もそのように理解していたであろうことは想像に難くない。

弘治三（一五五七）年に後奈良天皇の崩御をうけて踐祚した正親町天皇の即位礼は、宮中の逼迫した財政状況のために挙行も儘ならず延引、毛利元就の資金提供のもと、三年後の永禄三年によりやく実現したことはよく知られている。その即位礼を間近に控えた公卿の動向や人間関係は、『言繼卿記』から微細に窺うことができる。以下、関連記事を検討する。

一日……：細川兵部大輔……：礼に来云々○午時内蔵頭近衛殿へ御雇之間參、暮々帰宅

〔言繼卿記〕永禄三年正月一日

元日、山科邸には早くも第八百韻の発句を詠出する細川兵部大輔藤孝が新年の礼を取るために訪れており、言繼との親交が垣間見える。午後からは言繼息の内蔵頭言経が家司として仕える近衛家へ参勤している。言経の近衛家への出仕は將軍（足利義輝）邸に参上した三日を含めると連日であった。

しかし、聖護院で連歌が興行されたという五日については、
五日……：○早旦内蔵頭参近衛殿、晩頭帰宅了

〔言繼卿記〕永禄三年正月五日

とあるのみで、同日は禁裏で千秋萬歳が催され、言繼ら公卿の多くはそちらへ伺候していたことが記されている。この日から千句連歌が興行されたとは、到底考えられないのである。はたして、

七日の条に、

七日……○自近衛殿御使有之、從今日於大覚寺殿御千句有之、彼門跡へ可参云々、嘉例之祝以後参了、亥下刻帰宅云云

〔言繼卿記〕永祿三年正月七日

とあり、傍線部、千句連歌は正月七日から大覚寺門跡で、公卿も交えて興行されたことが知られるのである。近衛家との親昵な關係を考えると、言繼が日時や場所を誤記した可能性は極めて低く、畢竟『習見聴諺集』の記載は誤りと見做さざるを得ない。更に、第二百韻発句を大覚寺義俊が出詠していることもあり、「聖護院御興行 正月五日」は「大覚寺御興行 正月七日」の錯誤である蓋然性が高いと思われる。したがって第九百韻の発句作者は大覚寺新門主で、聖護院道澄と同じく植家息の義性であると考えられよう。ただし、永祿三年当時は聖護院・大覚寺ともに近衛尚通および植家の子息が門主・新門主を二代にわたって継承していたこともあり、混同されたのは単純な誤りとは言いつれず、勘案すべき事情も存在していたのであった。

二

一方、「御即位の前日御興行」の三条西家での連歌会の背景はどうかであろうか。

永祿二年十一月十六日、決定した即位式日程は、同月二十七日の将軍義輝の申し入れにより延期、永祿三年正月挙行と定められ

た。しかし実際は、永祿三年正月十六日『言繼卿記』の「○三好修理大夫前筑前守、上洛云々」という三好長慶上洛の記事を承け、十八日条には、「○御即位来廿七日へ御延引云々、自三伝奏案内有之」とあり、御即位伝奏の万理小路惟房、柳原資定、勤修寺尹豊から即位式延期が報告されていたものの、『言繼卿記』同月二十日条に、

廿日……○自柳原勤修寺使者有之、三好南方に隙入之間、御即位於御延引者可罷下云々、仍可為来廿三日之由有之、装束以下之事に、及数度使有之、○大内記被来、就御即位之儀被申儀有之、○申刻参内、右衛門督長橋局迄召寄、御礼服、大袖、小袖、御裳、玉冠、玉佩、綬等檢知之、玉冠玉佩損之間此方へ申出之、総別御礼服内威頭平生預申者也、雖然近代文庫無之間被置御倉、三十余日以前此方へ申出加修理之処、今度以新儀不被出之、不可説々々々

と記されるように、三好長慶の入京及び相伴衆任命にともなう即位式への実質的関与をめぐって、公卿との微妙な駆け引きのなか、詳しい事情は不明ながら、即位式実施日を二十三日とする旨の情報も御即位伝奏の柳原家や勤修寺家からもたらされていたのである。

多少の混乱の中、儀式の装束調進を家職とする山科家では衣裳や持具の検分に余念がない一方、宮廷における緩慢な管理や連絡不行届きに憤懣を隠せない様子が窺える。そうした言繼の苛立ちを意に介することなく、正親町天皇はひたすら公衆を重用してい

た。『お湯殿の上の日記』（統群書類従補遺三）の同日、一月二十日条には同じ場面、『言継卿記』では言及されない事の顛末が次のように記されている。

称名院めして。萬御しよくゐの事。まつ御みまにてたつねられて。其後常御所にて二こんまいる。二こんめ御しゃやくにてたふ。帥。言継。永親朝臣。長橋。御礼服。玉冠など見まいらせらるる。玉冠。玉佩は。帥そんしたる所なをすとて申いたさるる。

傍線部、『言継卿記』では全くふれられていない天皇から称名院（公条）への儀礼、すなわち有職故実全般における深い崇敬を第一に述べた後、言継の心中の忿懣は「帥そんしたる所なをすとて申いたさるる」という淡々とした描写に暗晦されているのである。天皇の公条への信頼は、職掌に対する言継の矜持を傷つけるものでもあった。

永祿二年三月六日開始の『帝範』進講など（注5）、往時、文壇の重鎮としての称名院に対する天皇の尊崇は計りしれないものがあつた。その最大の理解者である天皇の即位礼前日、公条が表すべき慶賀の意の発露が連歌会だったのである。

では、その「御即位の前日」とは何時を指すのであろうか。前述のように、即位式の日程は度重なる延期をめぐって多少の混乱があつた。実際、『言継卿記』一月二十一日条には、

廿二日：…○葉室女房衆上洛、御即位明日之由也、但来廿七日へ御延引也、女中宮筥樽以下濟々云々、此方に今日逗留也、

永祿三年正月の近衛家の文事

禁中見物也、小御所御庭予令見之、

とあるように、傍線部、延引日時を誤つて二十二日を即位式前日と思ひ込んでいたものもあつたのである。しかし、管見の限り、二十二日前後や、実際の即位式前日にあたる二十六日前後にも公条の連歌会に言及する史資料は見出せない。逆にそれは、この連歌会が公条邸での私的な興行であることの証左であるとも考えられよう。

三

諸卿が即位式の準備に奔走していた永祿三年正月、大閣近衛植家の心情はいかなるものだったのであろうか。再度、冒頭の唱和詩に立ち返りたい。

実息陽山と惟高妙安との師弟関係を契機に、植家が五山の長老との徴逐を盛んにしていったさまは、前代の三条西実隆と東福寺の了庵桂悟との交友の例などを彷彿とさせ、決して特異なものではない。一見すると、先に挙げた『惟高詩集』所収の鶏日試筆唱和詩は近衛家恒例の催しを記録したようににも受け取れる。しかも、ここで植家の試筆詩に応じた五山僧はこれ以降も近衛家の文事と深く関わっていく学僧ばかりである。既に拙稿で述べたように²¹、詩文や聯句、講説など五山学僧に不可欠な学識の総てに通じた惟高・仁如は天文・永祿年間を代表する文学僧であつた。特に惟高は慈照寺入寺以来の陽山の後見役として、禅僧と近衛家との交流

の核となる重要な役割を果たしていた。陽山が永禄七年七月に遷化した、惟高が永禄十一年に示寂して以降も、仁如が聖護院道澄や紹巴との交流を端緒に近衛家一門との親交を持ち続けることができたのは、惟高の絶大な存在感の賜物であった。

また、玄圃靈三は足利義輝に仕え、後に細川家の家老職を務めた松井康之の叔父で、後に豊臣秀吉の腹心として、朝鮮との外交に腐心した学僧である。永禄三年当時は二十五歳、仁如門下の俊英であった。唱和詩にその名を列ねていることから、玄圃こそが細川藤孝と近衛家の交流の深化に寄与した人物であったと付度されるのである。

さて、周知のように足利義輝の母親、つまり足利義晴北方慶寿院は植家の父にあたる近衛尚通息女、植家の姉妹である。義輝は植家の甥であった。永禄元年十一月二十七日、六角義賢の斡旋で三好長慶と和睦、入京した義輝は、十二月二十三日、従姉妹である植家息女と成婚する。将軍家と近衛家の絆は更に強固なものとなった。

翌永禄二年四月、義輝に促されて上洛した長尾景虎（上杉謙信）と面会した近衛家当主前久は、六月、誓書をもって越後下向を約束したものの、翌七月、義輝らの慰留により、ひとまず下向を思いとどまる。父としての植家の心痛を除いたのは義輝だったのである。

同年八月、醍醐寺理性院敵助の記録「敵助大僧正記」（統群書類従雑部所収）に拠ると、義輝は近衛邸に隣接する武衛陣に武家

御所（公方御所）を建造する^⑩。幕府や将軍の権威も一応の回復を示し、洛中は久方ぶりの静謐を取り戻していた。こうした時期であればこそ、正親町天皇の即位式挙行も可能であった。すなわち、永禄三年正月は近衛植家が家運を賭け、命運を共にすることを決し、頼りともした足利十三代将軍義輝が、その地位にふさわしい威儀を示し得た慶賀の年始だったのである。

そうした植家の心の充実、それを端的に表したものが冒頭に掲げた試筆詩であった。

その表現を詳細に検討してみよう。

和氣藹然新歲迎 和氣藹然として新歳を迎ふ

奉盃試筆賞元正 盃を奉り試筆、元正を賞す

東皇巡狩春風国 東皇は巡狩す春風の国

一曲黄鶯警蹕声 一曲の黄鶯は警蹕の声ならん

大意は「和やかで穏やかな空気に満ち溢れた新年の朝、盃を押し試筆詩を製して元日を寿ぐ。春の神が巡り来るとようやく春風が諸国にそよぐというが、うぐいすの歌声がその先導役をつとめてくれていることだろう」となるうか。常套的な表現ではあるものの、初句「和氣藹然」はまさに植家の束の間の安寧を実感させる表現になっていると思われる。この試筆詩結句の措辞に惟高は「警ハ天子ノ行幸ノ時、ヲトリアリアルト云声ソ、蹕ハ御カヘリタト云声ソ」という注を記している。さほど難語とも思われない「警蹕」に言及するのは、初学向けに集められた禅林詩会の記録であるという「惟高詩集」自体の性格も考慮する必要はあるもの

の、この植家詠で描かれた春の神、東皇の到来に太平の世の天皇出御を重ねようとする意図があつたためと思われる。続いて惟高は次のように唱和する。

永祿三曆元朔

陽明殿下、有新春之尊詠、縦時風伯有意、吹著于野衲繩床、四七驪珠、璨々然昏眼生光、重於隨和至宝、是天賜也、年初慶幸蔑以加焉、感佩吁陽春芳調、雖和弥歎就諸徒春韶之列、寒竿凍吟一章拜獻大閣々々下、歷電覽則惟幸

(永祿三曆元朔、陽明殿下、新春の尊詠有り、縦ひ時に風伯に意有りと、野衲の繩床に吹著し、四七の驪珠、璨々然として昏眼に光を生ぜしむること、隨・和の至宝よりも重し。是れ天賜なり。年初の慶幸、蔑めどもつてここに加へん。陽春の芳調を感佩し、和すと雖もいよいよ歎かほしきは、諸徒春韶の列に就くことなれど、寒竿凍吟一章もて大閣々々下に拜獻す。電覽を歴れば則ち惟だ幸ひなり。)

朝陽明啓歲新迎 朝陽明るく啓けて歳新を迎へ

佳製祝延青帝正 佳製にて青帝の正を祝延す

十五国風剛後什 十五国風剛後の什なれば

一篇太雅入松声 一篇の太雅松声に入らん

大意は「初陽がのほり新年を迎えた朝、大閣殿下は春の神の徳を寿ぐ詠作をものされた。惜しむらくは時代が合わずその詩篇を『毛詩』国風の編に加えることができないものの、殿下の尊詠は太平の御世をもたらすたよりのなりませう」となる。結局は唐

代の詩人、章孝標の「風不鳴條」六韻の冒頭「旭日懸清景、微風在綠條、入松声不發、過柳影空搖」に拠る。静謐に治まった平穩なる御代を祝う表現である。

次に相国寺雲頂院の仁如の和韻詩である。

陽明殿下春首有

尊製、謹奉塵

蔽韻聊伸祝詞萬乙云

(陽明殿下春首の尊製有り。謹んで蔽韻を塵し奉り、聊か祝詞を伸べ萬乙云ふのみ)

年去年來屢送迎

年去り年來りて送迎屢はなり(注13)

君哦唐体祝王正 君は唐体を哦し王正を祝す

威儀高出漢家上

威儀は高く漢家の上に出づ

朝賀滿門車馬声

朝賀せんと門に滿つ車馬の声

解釈は「年を重ねることに交流を深めてくださったとは言うものの、今年は大閣殿下が漢詩を詠じて天子の徳行に満ちた新年正月をお祝いになる特別な年である。邦家の威光は中国に比しても遜色なく、門前は朝賀に訪れる車馬の声で溢れている」。この唱和詩起承句からも、植家の試筆詩が決して恒例ではなかったことが窺えるであろう。

そして鹿苑院陽山の唱和、

春自鶯梢燕采迎

春は鶯梢・燕采より迎へ

河清海晏建寅正

河は清み海は晏らかなり建寅の正

陽明殿下雞晨祝

陽明殿下雞晨の祝ひ

聽得三呼万歲声

聴き得たり三呼万歳の声

「鶯や燕のさえずりは春の到来を告げ、天子の徳行のもと河海

も静かに治まるこの新年、陽明殿下の元旦の祝詞に呼応するためであろうか、万歳を三呼する声わたくしの耳にも届いてくる」。最後は玄圃の作である。

陽明殿下 伏観試筆春詩一律

愚蒼風覽動第胸、謹依

敬韻勉賡臣詞

上献

(陽明殿下、伏して試筆春詩一律を觀れば、愚蒼風覽動第胸、謹んで敬韻に依りて俚詞を賡ぎ、上献したてまつる)

一 軫洪鈞萬景迎 一 軫洪鈞、萬景迎へ

衣冠文物賀新正 衣冠文物、新正を賀す

太平天子無巡幸 太平なれば天子巡幸も無く

柳巷花村歌舞声 柳巷花村も歌舞の声

「造化の力で天も改まり、待ち望んでいたすべての景物がそれを歓迎し、礼法も充実し、新年を寿いでいる。世は太平で天子の巡狩すら不要、春色の巷村からは祝いの歌舞の音が聞こえてくる」。第三句「天子無巡幸」から居を定め難い天皇をはじめ、戦禍を避けて流浪していた將軍や公卿を想起させることを忌避したのか、転結句は、

天子初元太平日 天子初元は太平日

風揺花柳亦歡声 風、花柳を揺らせば亦た歡声

という措辞に改められた。意味は「天子様がお迎えになる元旦初

陽は太平のあかし、花柳を揺する風は天下を乱すどころか、歡声を運ぶものとなるう」。この玄圃の唱和詩からは特に即位札を契機とした世情の安寧を冀う心情が伝わってくる。

如上、四僧の唱和詩はすべて世に天子の徳が行き渡るためには、大閣殿下の輔佐が不可欠であることを賛美する内容で一致している。そうした唱和に励精されたからか、植家は返歌一首と発句一句を製した。

クル春ハ道シアルヨヲ白雪ノ深キニ飯ルアトモタトラシ

一夜アケテコソトヤキノウケウノ春 植家

こうした詠作は往々にして当座性が強い。確かに発句からは即興的な色合いも濃く感じられるものの和歌は異質である。この返歌からは進まねばならない道のあることを自らに言い聞かせるような、二度と後戻りはできないという、植家の悲壮とも言うべき決意表明が読み取れる、とするのも穿ち過ぎではあるまい。

四

如上の試筆唱和詩のうち、仁如の作品のみ、その別集『鏤水集』や『翰林五風集』卷十二「試筆和分韻」部にも掲載されている。ともに第三句の措辞「漢家上」を「漢宮上」とする異同はあるものの、他の詩句は『惟高詩集』所収本文と同一である。また『惟高詩集』はもちろん、編年配列の『鏤水集』にも近衛家関係の新春試筆詩への唱和詩はこの例以外に見出せず、当初の予想に反し、

大閣と五山学僧とのこうした営為は決して恒例ではなかったと考
えられる。ならばそこに「永禄三年正月」という期日の特異性を
見出していくのも決して無意味ではあるまい。

正親町天皇の即位式は將軍足利義輝が帰京、三好長慶と和睦し、
洛中の平穏が保たれているという諸条件が満たされた中で挙行さ
れた。そして植家は、將軍義輝と命運を共にすることを選択した。
二条良基のように大樹（將軍）を扶持する道を選んだのである。
將軍家と摂家筆頭の近衛家との結束、それがもたらすであろう不
安材料を払拭する試みこそが植家の元旦試筆詩であつたとは考え
られないであろうか。

だとすると、その試筆詩と和漢一対となるべき営みが同年正月
五日興行開始の大覚寺千句なのではあるまいか。たとえば第八百
韻発句の藤孝詠「春風をなひきてさそふ柳哉」と玄圃作の唱和詩
結句「風揺花柳亦歎声」の類似性や、第一百韻の前久作発句「待
ほとに心にさかぬ花もなし」が追和詩に対する植家の返歌「クル
春ハ」と意味の上でも呼応する表現になり得ていることは単なる
偶然ではあるまい。また、近衛家の一門に近衛家主権月次歌会の
常連であつた宗養・紹巴等の連歌師、更に將軍を補佐する細川藤
孝を加えた連衆は、近衛家と將軍家が両輪となつて支える正親町
天皇の治世を寿ぐにふさわしい人選であつたと考えられる。なら
ば、作者表記のない第九百韻は將軍足利義輝の詠出であつた可能
性も皆無ではあるまい。

おわりに

即位式挙行から六ヵ月後の六月十九日、義輝は新造なつた近衛
御所に移徙し（『お湯殿の上の日記』）、しばし平穏な日々が過ぎ
る。しかしその数ヶ月後、閔白在京という父の願いに反して、近
衛前久は越後下向を決行、その後は大閣の意を承けた聖護院・大
覚寺の旧新門主が頻繁に諸国に下向し、和平の調停に腐心したこ
とは周知の通りである。そうした動乱期を背景に、一門の予祝の
ために植家を中心とする近衛一門が企図した営為が試筆唱和と千
句連歌という和漢一対であつたことは、当時の文壇の特色を端的
に示すものとして、文学史的に注目されてよいだろう。五山学僧
と連歌師という、応仁文明年間前後、室町幕府將軍の庇護のもと
文学的達成を成し遂げた双璧を、幕府弱体化後、將軍家との関係
を強めた近衛家が、まるでその遺産を受け継ぐかのように牽引し
た。この後、永禄年間から天正年間にかけて、両文壇の泰斗であ
る連歌師の紹巴と五山の仁如・策彦を引き合わせるのが聖護院道
澄や大覚寺義性であつたことに考え及ぶならば、その前段階、す
でに主導者としての役割に自覚的であつた近衛植家の存在意義は
更に称揚されなければならないのである。

注

(一) 拙稿「天文・永禄年間の雅交——仁如集堯・策彦周
良・紹巴そして聖護院道澄」（伊井春樹編『古代中世文学

研究論集】第二集・一九九九・和泉書院）、「永祿九年の二つの二十四孝賛」（『語文』・一九九七・大阪大学国語国文学会）を参照されたい。

(2) 夙に井上宗雄・牧野和夫氏らの諸論考で言及されていたものの、近年、武井和人・矢野環両氏を中心に書誌や伝来についての基礎的な考証が進んでいる。『習見聴諺集』攷——その書誌と伝来——（『埼玉大学紀要 教養学部』第三十八巻第一号・二〇〇二）等参照。このような基礎的研究を活用した成果に、「天文廿二年二月廿七日興福寺東門院家歌会」をめぐって」（『日本古典文学史の課題と方法』・二〇〇四・和泉書院）等の川崎佐知子氏の考究がある。なお『習見聴諺集』本文の引用は財団法人前田育徳会前田尊経閣文庫所蔵本文に拠る。

(3) 連衆の一字名については「顕伝明名録」や各種辞典類および『連歌総目録』（明治書院）などを参照した。なお聖護院道澄は一字名「白」、大覚寺義性も一字名「秋」を持つものの、現存する使用例は「白」は永祿四年九月四日、「秋」は同年九月十九日興行の百韻が最も古く、永祿三年以前の使用例は管見では見出せていない。

(4) 三伝奏の比定については「公卿補任」に拠る。

(5) 『お湯殿の上の日記』及び『厳助大僧正記』に拠る。

(6) 拙稿「永正年間の孝子賛をめぐって」（『鎌倉室町文学論叢』・二〇〇二・三弥井書店）を参照されたい。

(7) 注1の拙稿参照。

(8) 玄圃と近衛家の関係については稿を改めて考察したい。

(9) 『史料綜覧』巻十・永祿元年十二月二十三日条の記事に拠る。

(10) 永祿二年条に「八月日 従当月武家御所御新造事有之。」とある。

(11) 將軍足利義輝と近衛家一門との関係については高梨真行氏の論考「將軍足利義輝の側近衆——外戚近衛一族と門跡の活動——」（『立正史学』第八十四号・一九九八）がある。

(12) 『惟高詩集』の書き込みについては不明な点はあるものの、惟高の説を記き留めた可能性が高い。これについては稿を改めて考察したい。

(13) 第二句の訓読は白居易の詞「晚秋閑居」の第一句「地僻門深少送迎（地僻り門深くして送迎少に）」の表現を参考にした。

(14) この部分未勘。本文に何らかの混乱があると考えられる。

(15) 『翰林五鳳集』巻十二試筆和分韻部所収本文、前文の「塵蔽韻」を「塵韻」とする小異がある。

追記 本稿は『実晩記』輪読会（二〇〇五年十一月十四日）

での研究発表に基づいている。鳥津忠夫先生をはじめと

する参会者各位から貴重なご意見を頂戴したことを感謝
したい。

(なかもと・だい 本学助教授)